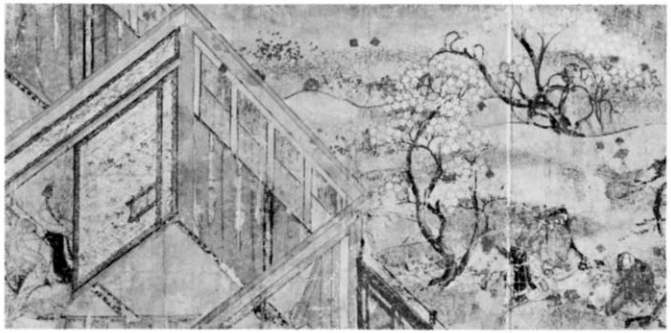
大和文華館の生立（その7）

大和文華館館長 石 澤 正 男



美術品の収集に着手された矢代幸雄先生は、実にまめまめしく活動されました。前にも書きましたが、大和文華館の最初の事務所の設けられたのは南河内の名刹道明寺内でした。矢代先生は長年住み慣れた東京が米軍の空襲で物騒になりかけ、また公職から引退されたこともあって、東京の家を処分され、昭和18年に神奈川県大磯の閑静なところへ疎開をかねて移転されていました。大磯から東京に出るにはさほど時間もかゝりませんので、暇を見ては東京の目星しい美術商を訪ね、先生独自の「美しきもの」という概念にふさわしい美術品を探し索められたのでしたが、京阪方面には毎月約一週間出張されて、道明寺を足場として美術商やコレクターを訪ねられて、優れた美術品の購入に専念されました。その頃の不自由な交通事情を経験された方々には、それは決して生やさしいことではなかったということがよくお判りになると思います。

美術品購入の記録を繙いて見ますと、今更ながら時勢の移り変り、ことにインフレーションに因る貨幣価値の大変動、当時と現在を比較して美術品市場に見られる著しい相違に目をみはる思いがします。よく矢代先生はその頃を顧みて、「僕が買物を始めた頃、一番市場に豊富に見られたのは中国陶磁だった。つまり文華館全体のコレクションを分類すると中国陶磁が一番数が多いのはそのせいなんだね。」と述懐されたものでした。購入された美術品の数量の点では昭和22年の177件が最高で、その中には中国宋時代の名画・国宝李迪筆雪中帰牧図双幅のような飛び抜けた名品もありますが、大半は中国陶磁が占めております。翌23年の購入品は104件と件数は前年よりは減ってはいますが、昭和21年の財団設立以来今日までの30年間、美術品の収集は絶えず続けられて来ました。しかし、年間100件を越える購入品のあったのはこの二年だけであります。もっとも一括したコレクションを受け入れた二、三の例外はありますが。

昭和23年は大和文華館の美術収集史から見ますと真に重要な、記念すべき画期的な年でありました。それは原三渓翁（1868～1939）遺愛の古美術品の大蒐集の中から次に挙げる作品が文華館に割愛されたことであります。先ず、装飾経としては厳島神社の有名な平家納経にも劣らぬ一字蓮台法華経普賢菩薩勧発品、平安後期の大和絵を代表する寝覚物語絵巻（写真左）、元佐竹侯爵所蔵の伝信実筆の三十六歌仙絵巻（写真右）が分割された時最も垂涎の的となっていた小大君図、鎌倉時代の白描画の優れた遺品である源氏物語浮舟帖、平安時代から鎌倉時代にかけて盛んであった弥勒信仰をよく物語る笠置曼荼羅図、垂迹画の柿本宮曼荼羅図、初期禅宗水墨画の名品・可翁筆竹雀図、同じく文清筆維摩居士像、初期狩野派の伝元信筆奔湍図、伝光悦作群鹿蒔絵笛筒、光琳筆扇面貼交手筥、乾山筆武蔵野図乱筥、中国南宋時代の作品として重要な伝毛益筆蜀葵遊猫図及び萱草遊狗図、以上14件。　この内、一字蓮台と寝覚は国宝、奔湍が重要美術品ですが他はどれも重要文化財という実に堂々たる作品揃いで、正に大和文華館収蔵品の核心というべきものであります。三渓翁は生糸貿易で成功した偉大な実業家でしたが、この方は再興日本美術院（大観、観山、春草に続く古径、靫彦、青邨等の画家と平櫛田中翁の如き彫刻家からなる岡倉天心門下の美術家団体）にとっては、再興の生みの親であり、これらの作家の代表作品を網羅した大コレクションをお持ちでしたが、それは戦後国立博物館に納まりました。矢代先生と三渓翁との関係を詳しく述べる余裕のないのは残念ですが、矢代先生の最後の著述となった昭和47年岩波書店発行の「私の美術遍歴」の中に二章にわたって興味深く書かれております。この本は先生の美術を中心とする自伝というべき内容で、大和文華館の設立についても詳しく触れておられるばかりでなく、全巻興味津々というべきもので読者にご一読を勧めたい本です。

大和文華館では発祥の地ともいうべき道明寺には昭和27年7月まで事務所を置き、それから大阪市東区船越町にある近鉄所有の家屋を提供され、そこを事務所とすることになったのですが、道明寺時代に「大和文華」という美術専門の季刊誌を矢代幸雄先生の監修の下に発行することになり、その第1号が昭和26年3月1日付で発刊されました。このことは美術品収集の方針とはまた別な意味で矢代先生独自の構想を具体化したものとして重視するに値することでした。（つづく、51.9.11）

季刊 美のたより No.37
昭和51年10月15日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.